



誹諧溫故集

卷之下

平

文



粘
2243
卷



文庫
文舟

誹諧温故集之下

文学小堂

とら

東武 雷風菴蓮谷選

秋の部

立炆

明治四十一年五月十四日
富山房記念 氏寄贈

凄涼の毛吹消しと秋の秋 し由

三又もせとや望月の夕秋 元隣

かたりの瓦とつしやと秋の秋 尚白

ひしあとのあをを質のよを
あつしはまき舟の風流

あつしあのを秋とつしと秋の秋 蓮谷

セタヤ花とけふあはれしもの夜 芭蕉
 ち切の夜まゆめりり天の川 其角
 肌さむきはけや星は別道より 乙由
 けさあめうれありくや如セタ 才麿
 まぬまを梶の七葉やまぢる 貞佐
 セタヤ花よりしては又けしき 白雲
 セツふよ同つめりきつ天は海 珪琳
 せきしけふくく魚け細くこの川 沾洲

我や絲をとりて遊天の川 起波
 セタヤよりうきあはれと三浦の舟 舟通
 霧の橋や踏入の百人一首 許六
 柳て葉をうへ花へしてこの川 菊輔
 霧やよのきりあはれとけしき 起波
 昆布の葉のたけ通ぬ天の川 敬雨
 せきれいの尾も尾とけして天の川 蓮谷
 遊花のけりりと浮や星は心 嵐雪
 月の七日燈りて星の出無りか 宗因

天地と題し

天よあつとひつこのおと 宗因
地よあつとひつこのおと 其角

玉祭

雲ふゆふ 捲る 兵ありの 玉より 琴風
み解し みの 玉より 玉より 起波
玉 玉より 玉より 玉より 餅夢
玉より 玉より 玉より 玉より し由

燈籠

高 灯籠 ちんかり 記よ 負佐
高 灯籠 ちんかり 記よ 千那
高 灯籠 ちんかり 記よ 其角

盆の月

満 盆の月 蓮谷
あや 盆の月 瓢斗
ほろ 盆の月 大梅

踊

稽古の松きあり出まのりゆ 氷花
 朝ふらふるふ足しする踊 踊 踊
 春の初めはて踊のりきさうを 欠位
 刀夏の新ちれてふしむらうの踊 振波
 一やかりの宿人進まぬらうの踊 尚白
 一も金銀とありておらうの踊 キ舞

稲妻

いらつや准自う出て愛よ入 古山夕

稲妻や石白耳のあらしなり 家云
 いふつやや粒去るに富の庭 赤湯
 稲つ月の涙とありてまやうの上 ちよ

秋風

秋風や霧を曇も石能の園 ち世城
 秋の心のこころは揺すまは 嵐言
 眠あてや宵よかりの秋の風 出此
 古くといふよの出来や、秋の風 又美

秋風やふらふら吹くはるす膳下の蝶
瓢斗
かつらうとわかれゆく雲や秋乃風
秋風
秋といふ風ハカウハ心違ふや
き

露

ゆかかやそふかふらるる露不
宗因
朝露や指もくさるるうつの山
甫山
ふら家や雨よ目と指うくつり
嵐智
ゆかかやうふせ一分あを夜初
挑ち
みけとやそくさるるあかめを
玄扎

女郎花

愛々其根ハくろくさゆ
梅盛
月のくさくさをきく志留草ハくさゆ花
涼菟
指人よ立物さかろやゆ
ちよ
葉のほのこはぬあやむを
すはら
口能て笑やあむや
起波
精よくさくさるる
青岬
あつらひはまもくろくあへのゆゆ
季吟

朝負

朝負の折角吸てくま世なる
 常牧
 朝負の折角吸てくま世なる
 来山
 朝負の折角吸てくま世なる
 専吟
 朝負の折角吸てくま世なる
 貞佐
 朝負の折角吸てくま世なる
 珪琳
 朝負の折角吸てくま世なる
 杉風
 朝負の折角吸てくま世なる
 蓮谷
 朝負の折角吸てくま世なる
 沾洲

蜻蛉

蜻蛉の折角吸てくま世なる
 沾洲
 蜻蛉の折角吸てくま世なる
 起波
 蜻蛉の折角吸てくま世なる
 珪琳

虫

虫の折角吸てくま世なる
 去来
 虫の折角吸てくま世なる
 丈草

けしきの控 西かきし 春の声 思也
 武蔵地 新田 暮らみより 春の声 江波
 春のれ 生声 かくら くと 三つくす 智月
 脱くく ちちく びて 死ねや 秋の聲 大系
 ぶくく や 山 城 とも 墨 皮 けの 声 白
 甲心く 鳴や ち 秋の 古 我 集 其 蒼
 秋の 妙 入 入 たら たら 裸 心 琴 風
 けら 長 さ 八 中 髪 少 鳴 言 家 古 立 志

薄

林 けの 冬 け け 人 け け け 角
 角 けの 冬 け け け 角 冬 角
 梳 けの 冬 け け け 尾 冬 角
 岩 洞 中 の 林 け け け 冬 角

秋の月

月 けの 冬 け け け 冬 角
 月 けの 冬 け け け 冬 角
 鬼 也

晴のらうらうと海と下りあつた月 立圃

我と連て我親入る月お月 素堂

らの月や海みほこの樹うら 柳立

天の戸のすうしあうよ三日の月 光貞 素

源川まき

舟のうや照月をいと抱えうひ 欠代

月、撰入とりの題を

閑さどくけかりん石松の月 虚若

あさくやまきうう月のふれ義 令徳

有ゆや二才と秋推の梢より 伝法

一指とりつる月の本す夏は 欠代

罪をうて配取の月や伝法先 牛爾

兼應元季八月長秋のうり
欠室あまの点をゆうしゆり

時栞園めあ共あり

天のうらあうせむむらや秋の月 欠法

海を志とらんのもめ又あ 欠室

鳥をよみらぬ移り考ええく 西武

李夫人と秋室記

李夫人去漢皇情

月うらやまの海とくくぬ袖多那 欠作

揚貴妃歸唐帝思

名月や海とくくぬ鏡立 張汝

會芭蕉菴辭

山素堂

とくくぬ世に居る月と鏡ひてそく月と
り秋の人あり鏡は糸の借ありすこく
ほるのこくふるもさくさくさくさく

冷き流れのそとて石山の雪もはくさく
文軒の月も晴まへ居る海もさくさく
かくもあはれも月も借されてさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさく
ありさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさく

翫月辞

野立圃

昔よお侍の人くしと昔の月ハ定まらずや
ふんかしのそやとひ定めて日のうちあり
出陣いさむらむしる月さかすもあまほし
光りたりしつらむしあつしあまほし
今のそねの影くさしやうもあまほし
あまほしとあまほしとあまほしとあまほし
あまほしとあまほしとあまほしとあまほし
あまほしとあまほしとあまほしとあまほし

いと人く笑つりやとあまほし
この都もあまほし日松の山もあまほし
月も桂川もあまほしとあまほし
いと人く笑つりやとあまほし
あまほしとあまほしとあまほしとあまほし
あまほしとあまほしとあまほしとあまほし
あまほしとあまほしとあまほしとあまほし
あまほしとあまほしとあまほしとあまほし

立圃

良夜

名月や耳の山風自のらりり 信徳
 船のこゝろにぬ里もあつたの月 来山
 名や原中へ入る世界月をこゝろ 西鶴
 空のゆく人を休むる月足所 立圃
 鳥懼る念の多かりしとてよりの 芭蕉
 名月や柳の枝をこゝろへ吹 具角
 去りておとろく包めりよの月 峯雪
 路通

芝浦の虫もあつてよりの月 貞作
 影の月や海をこゝろへ吹 琴風
 精をの泉のあはれよりの月 白雪
 名月や霧の光を我無明 貞作
 足と心を定むる日あり月と雪 山夕
 濃念のちかよりの月の光 黒露
 名月やえりも原の お筆 丹雲
 名月やうらひも柳のあふれ 菊輔
 名月やあつた蛭子のまじりゆく 蓮谷

頃平の平家かきりて月え糸
名日くわいよ黒い居み 蓮
名日くわいよ黒い居み 武義坊 其茶
名月やまの 新日のよい木 吹風
二ののの介ハ他人の月足す 浜洲

鶏

ふりくわいよ黒い居み 休甫
屋根くわいよ黒い居み 古き城

美のよも、麻袋と和る 鶴の介 欠代

雁

何さふりくわいよ黒い居み 千田
和ハや山配とて此よきく次 ちよ
くわいよ黒い居み 乙由
神のまのいけふくわいよ黒い居み 蓮谷
くわいよ黒い居み 浜洲
神房やがりの 浮の舟の目う覚る 玉珠

神ノヤカ 鳴子 松の声 蓮花
くつ丁や 鯉も立はく男あり 天竺

礎

猿ノハ 猿のハ 社とあつた
右ハのハ 雄をさふさめつた 飯足
冬うつや 耳ハあつたの 遠入口 蓮花

亀

麻の音 ころり 角ハあつたり 乙由
園中のハ 杉の音や 麻の色 蓮花
麻の尾や 木の葉 後のまき 立志
麻の音や 葉の山の形も 燕の巣 乙由
笑くくはくく 細く 麻の色 蓮花
飛麻も 麻の音 麻の色 挑隙

鳴子

松の音 鳴子 体ハあつた 玉塚

後倉の坊主の

佛舎とありて

法花経の流るるの如く
わたりての麻もなるしん

蓮花

千回

稲花

秋のやうにふとふと
世の中は余あつて

欠位

稲花

葉山子

乞食も此の如きなり

葉山

秋令の涼なる交点の
及々り拾ひあつて

しは

珠露

秋暮

西りの姿を海の中を

宗同

西の女入替なり

し由

耳流くのひくく

千回

廣はや脊負て

非有

立出くし

嵐音

自画賛

あらしひけ我も淋しな秋のくれ
をそ我

秋のくれ

清くを言てとよきや秋のえ
御立

あやとくや
あそありおふ

あふれ子や猶飯ふ秋乃くれ
尚白

あふ山の不二
秋乃言
き御

紅葉

日ハ入るもま時清かあふれ
久代

り秋のくれ
し由

おあふのか
秀和

いあふふ下
蓮若

あふふもふ
立圃

菊

かんくんのみ
花酒

菊さく下
蓮若

松の尾う杜氏あけしや下菊
超波
あけくのも乃居右や菊の花
蓮谷
みくく子の百舎ふ合ぬ葉のらこ
無倫

芦穂

あけのるやあけあけのるま心
丈草
きくのもあけあけのるま心
路通

十三夜

十三夜山と空をみる好夜
貞佐
三日月のち月あり十三夜
珪琳
流石の面よ月の名跡や十三夜
貞佐
舟も山と夜をくく十三夜
し由

栗

スレ山よこ

あけのるやあけあけのるま心
素堂

いづれも袖をよみ後の思ひる 其角

葛葉

遠の跡もあへり 葛の葉のくま 嵐雪

このやういふのやうに 葛の葉の 宗因

秋雲

秋の雲富士とくらくあめあめ 古ト尺

吾輩もとくあてに 花のこゝ 鬼貫

秋

四十雀とよもやうな山崎の 慶友

その色もありともあつてに 芭蕉

とよもやあめそのくれて 言水

あつてあめ焼くわにの骨 其角

算持やあめあつて神と 常陽

夕のあつて秋はあつてのせう し由

毎あつてあつてあつてあつて 一品

武蔵那や沖ハるるのまゝのむ

出雲
風水

宗祇法師三回忌

世よりれく比獄へあぬてあつた

宗鑑

秋の田や中りたてして禪二儀

尚白

多るや皆妻あふふくあま

無倫

あまのまるとはるまゝやあか

貞佐

せまのいやはかたあつてあの上

超波

あやの仙やうらうあつてあ

蓮谷

足りあのけはあ及んてああ

琴風

對園女辭

西鶴述

作勢小町とてあ世のあ人ああ

うらう園といはああああ

あまの海速の里ああああ

あまの海ああああああ

あまの海ああああああ

あまの海ああああああ

あまの海ああああああ

あまの海ああああああ

かきし秋風の夜ふくしの去七郎さしひか
そよとゆたはゆら。

清夜やあ風ふさる女あまの 西鶴

又月や望しつらハけき娘のよ 其角

みかけと神さる人ありかたの

栞のま山の色この花のうら

りののほらよのあまのうら

とあひぬきしあ

栞のわく去母山のもの美人く 崙雪

池のぬるくや目とすき秋のこ 一晶

栞もや地と解さのかう衣 超波

かきまよや松の産塚のそり口 敬雨

り栞や信も信しし弟あうら 蓮谷

せある方のうらさみや墓まうり 珪琳

八勢やあれのあらしのあふれ松 起波

朝しける葉のゆめをや不二あら 馬光

よのうらと心あまの秋の懼 隆平

かきまよのよ秋と皆真あひて 蕉翁

ゆかまよと栞の栞や墓まうり 其角

冬の部

木枯

あかりしの果はさきりし海の色

言水

こころしめ天の月の夜ちりり

荷兮

あ枯やまもえん夜ちりりもせは

智月

うらしや候の目よるあやうす

蓮谷

貴船よ

風よ夕の毛しよるり山の家

同

あしりよるらあしつ尾長鳥

珪琳

時雨

一順のに向めりり一時

宗因

耳くもく耳あらしめあふらぬら

一品

風声天地のかうりりりり

ふゆのうらみしきりりりり

湖春

そのいふ乃物れ之雲りん砂時而 し由
まらぬや常流のつね小倉山 起波
月と日と皺とよせしるぬるるを 珪琳

あまのついで

まろしを人をもよほする山ありぬ 其角

ゆめゆめのかうくせまるまらぬる 黒露

いづつちのかげに眠るは雨の 宗瑞

外もたたく面は 餅夢

何とたぬ如とも 耳谷

山ありては

鎌倉一覽亭記 雷 蓮谷述

瑞屏山といふ山ハ八曲をのりて
頂上より方まの亭あり是と偏界一覽
亭といふけりありてハむし左る段基成
のちありては道や祖佛もはたふなく
風雅ともとの心多しといふ徳をらん
とありて今ハ其亭も中たのむるはて
是ありてハ礎はりて名もいふらん

春の世も其世の面影をへんむすんもあま
 けハ松よ月照てふうけを雀うさりの
 められもやういむの音うぬらん月よ
 郭らもいひいひいひの音いあまの
 音うさりの風情とあまのうさりて
 い山のともうぬあていんとくうさりて
 うさりていひいひいひいひいひいひ
 とあまの音うさりていひいひいひいひ
 山をうさりていひいひいひいひいひ
 蓮谷

落葉

春の世も其世の面影をへんむすんもあま
 けハ松よ月照てふうけを雀うさりの
 められもやういむの音うぬらん月よ
 郭らもいひいひいひいひの音いあまの
 音うさりの風情とあまのうさりて
 い山のともうぬあていんとくうさりて
 うさりていひいひいひいひいひいひ
 とあまの音うさりていひいひいひいひ
 山をうさりていひいひいひいひいひ
 蓮谷

初雪

たつやうやいせいのえんよひえの山 如泉

ゆかると甲うめいしてわらう亀 白雲

はつやうやいせいのえんよひえの山 宗瑞

ゆかると神をまよふ人あつる 超波

ゆかるとまよふ人を判人もあつる 安士

たつやうやいせいのえんよひえの山 木因

雪

白くや焼ぬむしーの雪め枝 忠知

雪のねる松も久しうもあつる 宗因

ふとん金へしを佛やうにおよぶ 其角

何とせんも雪はまよふあつる 徳元

あつとつるを連てまの
あつとつるを連てまの
我子あつるはつるはつる 之め

あつとつるはつるはつるはつる 路通

あつとつるはつるはつるはつる 作者不知

あつとつるはつるはつるはつる 休甫

あつとつるはつるはつるはつる

武蔵原の雪の如くまき七浦 欠化

無くしてさきくや雪の門 去来

雪の如くや雪の如くしてはなれぬ 晩山

必死の心

山をめぐらうともおぼしつねの雪 大高氏 子葉

寒山 賛

一葉の如くは川の如くくを今もつな 千浦

如かしくし一葉の如くくは川の如く 秋色

雪の如くは川の如くくは川の如く 玉塚

大高氏の如くまきくは川の如く 欠化

和州の如くまきくは川の如く

雪の如くまきくは川の如く 蓮若

雪の如くまきくは川の如く 奉白

狂女伝

狂女の如くまきくは川の如く 言尾

狂女の如くまきくは川の如く 藤雪

狂女の如くまきくは川の如く 小葉

寒

以脚の指を封じて

寒いところを起す所あり

任是人

川口より二尺をぬきのまゝ

沾洲

手をかハ尻をかゝりてさむ

困女

膝より

大石のらまらうとてふるま

汗六

疾振の息をとてつけるま

瓢斗

とととてぬぐひぬぐひぬぐひ

汗六

耳振る

耳をひいて鼻をかきぬ

蓮花

音振る

珠振りて二粒をのぼる

同

まねる

灯心のありしけり

同

残りのやきもぬ

し由

隣りう合ま物の松

巴指

飛相

白仙ききとあはれ いしもの

古もや端切大根のききの 東山

慈取のきりあはる きき

きき

きいしと麻とけりし 蓮花

神をのり念 此世

妙身童女とあはれ

きのきき きき

霰

心つれて きき

花脚 きき

愛宕山

土心 蓮花

きき 同

土母 欠位

紙子

かり懸る外倉の片づれる紙なる
名はつと瀧の流しかみこう那
定夜のをそめありて糸の糸
まどやどかいと裁とかみこう那

陸逸作とて

陸逸のうしろさぬくの紙なる
蓮花

氷

葉のころの氷と書する氷う那
俄鬼の目とおもひやぶ氷う那
荒海へ舟わらう投るあゆみ

一休和尚も仲みの二字あり

持出せば氷るもる
陸花

栞苾り一ふり封して

柳ののころの栞へすなわ氷う那
天竺

さかほののころ

そくくのまどはあけ氷う那
蓮花

七十一 五 五

すれあつと

やうこる心

折あつと

ほふかへん

檜くつき

あうあふさの

折きまか

ゆゑぬ乃成や 檜鼓 千面

頭中

うららうー作違あ人 丸政中 五札

淵すーま白雲ーりきる 政中 木守

いらくの政中 結果や 丸政中 折る

星野山 五五かろーと 丸政中 五紙

人衆の 五五まろーり 丸政中 舟我

上ちの 味ゆつさ 丸政中 隆平

夢の中 戸丸い 丸政中 蓮若

道は けりし 丸政中 山田

次 煙

懐りや 大雁さーのさうさう 五紙

服袴と褌と夫婦と大雄の家 奉白
大雄をいれとすむる人を磨る由 欠代
侍ハ ぬき入るるよとくつらふ 支考
山ちうとけるよとくつらふ大雄の家 遠十
我もさうさうの世のぬき入るる由 立志
いふくよとくつらふ病氣と大雄の家 性謙

火桶

抱て扇も肌ハゆらと大雄の家 欠宝

ふくふく大雄の家と大雄の家 宗瑞
大桶抱ておふか肌をかき割り 万延

千鳥

は風いしとて中より交わる 欠宝
一羽うち二羽くつらふ大雄の家 也持
根のゆらと借まや 漢ちり 史那
る海やもとあると大雄の家 遠十
さふいしとて中より交わり 其奈

きんぎょり 秋のつらきり さるのる 身若

中々の様さ

上るりも 位 下なり 清なり 蓮若

あゝ人のあしうらさを

ちけややけ 福つるる 友なり 徳琳

網代守

膝のりも 月とあれ ありさ 木守

網代さる 海のあつさ ちなり 海六

あつさよ ちせのせり ちりさ 美考

あつさのわらさ せはて 網代さ 石辰

あつさ 桑師の物なり 網代さ 遠若

あつさ ちのちのちなり ちりさ 貞代

あつさ ちのちのちなり ちりさ 貞代

冬巻

今屏のちのちなり ちりさ ちせ成

大根のちのちなり ちりさ 理瑞

ちんちのちのちなり ちりさ 石室

かろ鐘もえ也の響もきこの 芭蕉

志ら笑のあのちさりやまゐる候 宗因

葉のむのちふくへてきく卯 李蹊

いせのし曲へ又通のくみ

秋の葉の枯てとれううふ通る由 蓮谷

雪よと一首よのこりりまの由 し由

古師及いえあまふ人と大根川 其角

傳掃

嵐几や竹のとりりて傳もくひ 幽山

まゆりてそのとめえと標拂 し由

大黒のひかひほくやせえらひ 同

標をきやけいもゆえとてと氣の下 玉蛾

わらうとちうといふ歌を

標拂の候を派く肘さうら 蓮谷

町人の残えつみなり標はひ 菊輔

年暮

草法天もつとてとさう年の暮 貞徳

身のまはらうつねの危なきなり
 貞室
 自ふそく耳もちうまのくも
 西武
 羨りやうせかたありてそし忘
 玄扎
 自さぬまをそくしうちを感り
 芭蕉
 仰まよ。雉子拾のきりし言の言
 言水
 おろろり。や女の目まよのくも
 信徳
 いぬくと人よのぬつろしめぬ
 路通
 念ふして遠ておろろく作をな
 雲靴
 人ぬもたりとそくせよの言
 貞佐

享保九年

津風やいせの山田ある鶴氏の歌は
 ゆくゆくせしききてまあるはむ
 十四日
 わさねでたけのかつるゆき
 心を
 別をそとくおのこころ
 鳥護増賀夜

第一ぬ後ろきりし言あり
 美者
 花感西行時
 花もしく泪やぶてふかこまり
 同

何ものにも事の如くいふの師をうや
人海に到るめのお花のお思ひ
静まのよひ言鞠のよひ
ありとやほほえみ笑われし言
ふとよむ其の言はく事のかき
手紙やま分り難とよはる
徳元
其角
和英
嵐雪
文麟
珪珠

おこぎの浦より

月と日のきしひかたを師をうや
市へ入るとははし心と師をうや
蓮谷
素堂

光陰道行 晋真角

素戸をぬけて出のふと事人目とかられ里
あつたしくとわらわらん鶴も鳥の要り
静まのよひ言鞠のよひ
二見かた作務の神のそとをききや
かるうや小車の扱うあつたのふかの
秋風のよひ言鞠のよひ
あつたしくとわらわらん鶴も鳥の要り
あつたしくとわらわらん鶴も鳥の要り
あつたしくとわらわらん鶴も鳥の要り

ふうてっ中へはけさず 巳の月と後
ゆりての指さひもそのむかぬ川やしく
ぬきかけしきさうへうれきこえ スツトニトシ
そんとおてゝさうへうつみきん杖の下より
も歎とありしをよあつとふ世の中へ
うまゆめさあまのこゝろさすはあわれ
又よ返の園もも一葉のゆきせもまら
さし百あとかさうかすの終りもさう
あゝ声の 涙まの 中へさしきハ物も針

ほも玉めしとあかしくひさり 荊榛の衣
とや伏しの里のぬりたるよめう君の心れ
うらみあふらふのさうしては地獄よ
さあふ

嵐もやうてあつせんを電 其由
川つぎふおろへる嵐の那 同
あゝ嵐のさとうあしんよ茶 同
あゝきん我や嵐もいれん 同

松ありて空へ解ひく氣なる 欠徳
蕭々たる涅槃の指と徳あり 玄名
聖宗盆や徳く氣の集うあり 粧唐
氣平して氣あつたる ありあり 百里
物くめたる中より氣のそくあり 欠徳
ありあり氣の集うところん 立志
遠くありあり氣もあつたり 園女
善くあるの徳ありありあり 徳唐
殊々ありあり氣の集うところん 其徳

湯成五倫

君臣有義

赤くありありありを忘れし 其角
修飾のたのしみありあり 沾徳

父子有親

純けや徳ありありあり 其角
ありありありありありあり 沾徳

夫婦有別

新法めおくとおれとありれ

其角

けつこのおむねよのあふれ

沾徳

長知有序

積道は始のよふとるは

其角

おれとともとてしとるは

沾徳

朋友有信

君と我様ふよとてしとるは

其角

有つりか世法やとるは

沾徳

答雲虎和尚

園女

ゆる書の言はれしやふか来真不承

大乃の根原誰もあふ不承

心原此のゆてのふれと柳原花

其候かして帯ふ句といひ

おひやるととてしとるは

もすゑの口業よてと法

候しあふと不承

とてしとるは

今もわが心は——とていふ。きき分る。人
の心はわが心とていふ。おしりなりがうら
かたゆら——とていふ。

和玉韻

自己念其不真心 法舟已耀一灯心
市中點ニ有明鏡 全識人間清淨心
誰うんん——とていふ。きき分る。人
の心はわが心とていふ。おしりなりがうら
かたゆら——とていふ。

源光外伝の法舟より

きき分るの代を

その間の法舟を記して

源光外伝の法舟より

きき分るの代を

源光外伝の法舟より

人おの一族きき分るの代を 負佐

源光外伝の法舟より

源光外伝の法舟より 其角

源光外伝の法舟より

高松や松公附るるのうへ 山々

あふり霧と電るる

あふり風流るる山はく 嵐雪

深義家与ると皆むる

鶴飛ゆ八幡と命とらけ 氷花

同奥州攻めゆ

ふれ手 鶴ゆりしも山の山 専吟

宋任都より争と森まゆ

同ゆ 和のふちうゆり 梅の花 琴風

平太盛法をのたきりしと 担ふるる

まじりのゆりゆり 雪 浮生

源光政 鶴と好るる

うやうやの鶴とゆ 雲の郭と 沾洲

平太國 法盛を伝ふ進むる

いよ 鶴 雲より 平太の者りうか 露言

富上川より 軍を伝ふの好むる

ゆき 飛んて かくひき 風のききうか 蓮谷

田原入を伝ふ 傳ゆる

母衣うけし一踏もあはれ川柳 古 海

宇治合戦のうら

枯きみや 言ふとちんねし甲州 達 若

宗盛奈都さよさるうら

車うしとんしとん入るや山 キ 自

源頼政自教のうら

あつのもやどのなる果のなるはじ 達 若

主盛醫王山へ金と送らう

度とも親のひうらと金銀花 真 茶

か山草花のうら

園果のゆえしとあはれ 池 洲

待賢門夜軍のうら

あのみしとら 付死の松うら 理 燈

井のうら 成 鶴

かすれおの 燈うら 琴 風

ねね作豆坐へ原罪のうら

うさとあれ 魅う小橋の田植腰 香 北

日義とあらうら

大根を中作夏の中族十二夜 欠代

牛馬丸も人斬のしり

長刀のお糸とて海へ指の月 支考

牛馬丸 奥州下向のしり

文の束とて赤い冠をよ根の家 寺田

赤い山角力のしり

角力とり並ふや根のしり 龍宮

根のしり 赤い冠のしり

根のしり 赤い冠のしり 欠代

青い武をよとて根川のしり 山田

美盛に付死のしり

根のしり 赤い冠のしり

根のしり 赤い冠のしり 欠代

義仲持真のしり

山吹もよとて出る田のしり 山田

高根系時先陣と

根のしり 赤い冠のしり 山田

根のしり 赤い冠のしり 山田

響の尾に流れるはる—をのふ 正は

たふとふゆを組討のり

たれ組入あつるうもよ 孤後の 宗因

たふ及一首の音のり

たふと一原のわかれ—火折のな 千海

たふ八巻合歌のり

川海をたてはつるあつれはるうくす 張俊

たふ平家舟うり月とてふ

真とてふ—あつれはる—たふ 池の

たふ我れう流—のり

たふ梅やおめはつるきあつよ 佐風

たふ瓢盪—のり

たふ怨や名もきるふきうれぬ 牡丹の 蓮若

たふ糸はみものやとてう川のり

たふ我とても腕のはつれはる—ら 鮮 天代

たふたふ 邪傾とて争ふの的のり

たふたふ 夫あつてう連休舟の—のり 蓮若

たふ 菊玉の夫とて負のり

室川やまの主人も膝しら 天代

盛徳の海

麦島の海 藤原のや 立志

新治の年

あゆまう川 藤原のや 曲

あまのや

新治の年 藤原のや 尚白

巴勇力の

新治の年 藤原のや 正秀

今井の事 自言の

藤原のや 藤原のや 白雪

藤原のや

田の曲の事 藤原のや 院亭

藤原のや

こののちと包む 芥子 琴風

藤原のや

藤原のや 藤原のや 弘法

藤原のや

八月五とちぬふおとれを痛く甚 似来

茂原富樫の園と通る

園まのこころゆらぐや 赤木海す 寺毎

赤木海すを帳と積る

陸力のいりしとこ、思あこみ 壺自

赤木海すを川よそに流す

赤木海すに 性生もの 十枚の家 しば

工原社跡の積る

くへてぬる高時殿の光くす 欠欠

和田ほりりの

赤木海すをいりしとこ、思あこみ 園十

赤木海すの只今うたれぬ 氷花

赤木海すをいりしとこ、思あこみ

万の赤木海すをいりしとこ、思あこみ 陸淋

赤木海すをいりしとこ、思あこみ

赤木海すをいりしとこ、思あこみ 去来

赤木海すをいりしとこ、思あこみ

赤木海すをいりしとこ、思あこみ 寺毎

秋成

とあることしるべしとありの群の古

貞代

時宗と捕

蟻たし川生

と書

公使と実録と物

怨物とさしあらし

執牛

武蔵守恭時

武目と定

舟りの上るやあし

と書

とある所れ裁法

月影のまゝ依帖

と書

とある所れ裁法

帯火の古ものあり

末因

とある所れ裁法

おもしろの書り

貞代

とある所れ裁法

とある所れ裁法

と書

とある所れ裁法

とある所れ裁法

不

不礼海のしり

蛇の及吐のしり

寺前

福村の傍干涸のしり

年貝のしり

洗亭

長崎のしり

わさりのしり

蓮若

お種入のしり

蓮若のしり

正威吉村のしり

正威親正威のしり

松若

お子城のしり

お子城のしり

作六

お子城のしり

お子城のしり

蓮若

正威天王のしり

末来記のしり

貞代

楊井のしり

松若のしり

松若

秋鷄 枝まきも中人の鳴けり
杜稗もあくるも地獄めのお
虚言傳ハ埃のに若をふきぬり
玉ひりりちうくまて田をうへ
坂も細雪のふれくまうかえ
物傳の屏風むきんも所
焼條の志ハ腹切しくまわらせ
よよまの鏡くま中一の信
糸まきの乳うた工ハ物とりけ

能 何人 漸んと其おるむ
うとん玉ニアまきおるるの月
おぬめりうさまねま向ん
おういしと物ううまかう角かれ
奴のに火ふ世のあられす
脱ちしは鞠場をえれハまのよ
丁取まへん 光陰の歌
木使てこめれハあハ死を
石丸とあうし海戸山伏

冷けとさりゆきて春の長
裸て昇て雲をさるい
小田原の風を吹くしりりよ
奈まよふとてはらぬ嵐屋中
月夕のころとて言圓換へつり
産院の踊りしりあふり
駕入る気もかけあふり
久米平内、側て二分倍
中の町とてとて川、白ひ

さきよりても麓校の文
その花おひらきを引あがり
雁々あふらん、極るるの音

栗穂菴即真吟

不通せし家も常の柳り那
山とぬらふよあふ夕陽
百病の病うしれ中の糸の出
皆とりのあふいせり川
超波

負作

蓮谷

沼洲

超波

三吟 蓮谷亭真行

崎くさ四十八字やまきくはる

東里

卯山のけくう尻うまふる

貞佐

通まての辻まうつむ柳うき

蓮谷

かよひあんなぬあよせ楽

里

冬月やはるをよ木の中は隠

佐

男のまうぬまうりの声

谷

温泉のふくろをまの 入る根

里

投出とあ 一はまとうつ竿

佐

荒るよ中の傍をまてせこあや

谷

目のぬ影と老のふ飯

里

春うれ今きけうのあ極

佐

首うもあけぞ我むぬのけ

谷

飯の湯る人通う月よあつく飲

里

いつは然一き山系鞠うり

佐

とんと奥六隅の隅あはる花の店

谷

春一初りよあけらるる 里

雛ちりき二十五日の湯浴なる 作

洗りの堂してさうくまひり 谷

地我お木のト富と守のとるは 同

舞やうと午の母をよほし 佐

後もせん捨て殺へた中うぬ 里

指あうぬんて思ひあせん 谷

屋あうと出さうともせん 佐

あの一戸をお家の神 里

貸たうすぬも梓よかけれて 谷

あけの負ハ浅奥標とるは 佐

新舞い拂ああるよ建るあり 里

さみせん折て短夜の月 谷

下りつるはさハすつりの後所 佐

比血尼の尻の馬あてんは 里

うらくとさるつゆり 通帳 同

打うううぬ柳よふとる 佐

猿丸の案一安を及吐の時 谷

棉の齒うる 雑沓のこ後 里
足向つのははききりむらり 佐
詩と片くらんるる 谷

東里 十二句

貞作 十二句

蓮谷 十二句

坤の巻は流りなりきりまの書

書林
市島右衛門

海序

雑沓とつかりあ奇うありてまの始りま
るあらし九雑沓のなきはききりあう
ゆるゆるあらしありされいん心もあう
初とされる自然のあういれ沓の怒り
あつみ早敷のうれへを即るる理もあう
師て、奇くききあうといひ、まといまの
の雑沓の始りまも山万あを眼裏
ちめてあうといふと思ひ、名もをく

心づかぬとてさへるる言の流れくをさへて感ひし
世ふ人の心乃りてくしより排俗の心なれば
乃りて益なきものと思ふれど世は
いはまに三綱五常のなるとりて富貴は
ほろこも貪欲は益なき世法の進退をま
とのなき刻なるんやさるは此れは思ひ入る
一物も都も鄙も師もあつて学ふは
かゝるは居るさふいと三人もまきいりゆふ
その師ありしをれよく其徳をたかく

其師指の排俗ともあれといふ人あり
いてや先達とあふくち武宗徳も仲興とい
ふも其徳の一字と起されしより名徳益
よふりて風骨のたふとぞしれあふや
さうあれと其先の排俗の風骨と何ふは太
波淀川なりとあふ集まありし首の心悟候
あつて花実兼徳のさうのたふより
其れ流るるあふくおの向もたふさふ
あつてあふたふの集るる面々わんざれ

うねよとらふつ中あもさ武の句はたの
 万葉ともあなふてしすての世
 立先ら歌編集の句あうそ元が出玄の
 心よわらめ初と案も皆古先うて
 今めくたるうの風集ふふまの論ありて
 どのつら山桜のむはううそ人あて
 ちりたるもほらやあてててて我
 思ひ世は世あうあを編集もいふな
 ううのあうりてそれもよ人の世は

名も跡うてあ古人の句も真て我は
 志うていひて申へるああて接す
 かさあふも又ちうやちうとそあうら
 きたる人の風集あて飛を川の例
 うあかきうはうもあまのあよりあは
 あてあうの風集を夕の風集よこふ
 案いふて古うてきよくん接る初あり
 ともあうて申る初ありて人とかうて
 もあうてやと時よあれあに伝はる人

はる世の人のあふと拾ひすりのこもて
とてまを祝のあふとけいもの
侯のまのあふとけいものあふと
くとて十万句のあふとあふと
ふたのあふとあふとあふとあふと
さふとてあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふと
人あふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふと

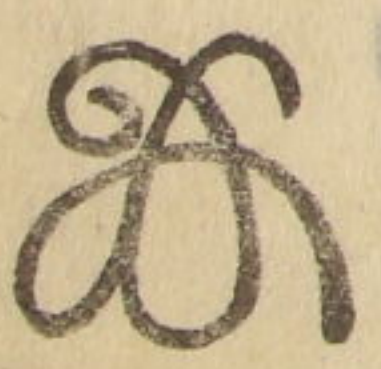
とらくあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふと

の梅もさきさきひしきとてその甲も意し
定といふあひも是皆心ほしむるは
のありさあはしとけり人のさくは
あしと我もあはしとけり人のさくは
心やりの温故集のつとけり人のさくは
よりの乾坤の二さしとけり人のさくは
今もあはしとけり人のさくは
よりのあはしとけり人のさくは
あはしとけり人のさくは

もけりと我もあはしとけり人のさくは
あはしとけり人のさくは
あはしとけり人のさくは
あはしとけり人のさくは
あはしとけり人のさくは
あはしとけり人のさくは
あはしとけり人のさくは
あはしとけり人のさくは

鐘度のほし

雷風菴 蓮谷書



文京正丸

延享五戊辰年二月廿五日

京都堀川通錦上町

西村市郎右衛門

書林

江戸本町三丁目

西村源六

持重
文舟

平冠村

石川庄

文舟

平冠石川庄